日刊工業新聞

(23)　昭和58年(1983年)8月3日　水曜日

九州ロ版

西部支社
支社長室
総務部
工務部
092(271)5711
編集部
092(271)5713
営業部
092(271)5715
販売部
092(271)5717
北九州支局
093(931)3237
長崎支局
0958(23)3821
佐賀支局
0952(26)1525
大分支局
0975(32)9451
熊本支局
0963(71)5366
南九州支局
0992(51)8421
山口支局
0834(21)3297

日韓を海底トンネルで結ぶ

建設費は3兆円超す

研究会九州支部も発足　21世紀へ夢の構想

日本と韓国の間約二百キロを海底トンネルなどで結び、高速鉄道やハイウエーを通そうという雄大な「日韓トンネル＝図参照」構想が練られている。青函トンネルの四倍、建設費は軽く三兆円を超えるビッグプロジェクト。ゆくゆくは韓国からアジア大陸を経てロンドンに至る「ユーラシア・ハイウエー」の実現を夢見る。構想実現のためすでに民間レベルの建設事業団、日韓トンネル研究会が発足、地質調査など研究も始まっている。建設着工ともなれば日本側の起点は韓国に最も近い九州と想定されることから、同構想に賛同する地元の関係者が集まってこのほど日韓トンネル研究会九州支部も設立されるなど二十一世紀の夢の構想も真実味を帯びてきた。

この「日韓トンネル構想」はもともと戦前からあったもの。国鉄技師らによってたてられ「東京発ロンドン着」という本の資料として実際に地質調査も行われた。しかし、太平洋戦争で計画は中止され、戦後、朝鮮が独立して話は立ち消えになっていた。

戦後の長い空白をはさんで五十五年に大手建設会社の大林組がPR誌で「ユーラシア・ドライブウェイ」構想を提唱。この中で日韓トンネルの技術的構想も打ち出した。そこで一九八一年、ソウルで開かれた第十回「科学統一に関する国際会議」の席上、東京から朝鮮半島を経てユーラシア大陸を横断、ロンドンに至る国際ハイウエー構想がブチ上げられた。世界を一つに結ぶことで世界平和の実現といった政治的な思惑もあるが、ともかくケタはずれに壮大なもので日韓海底トンネルはその一部に当たる。

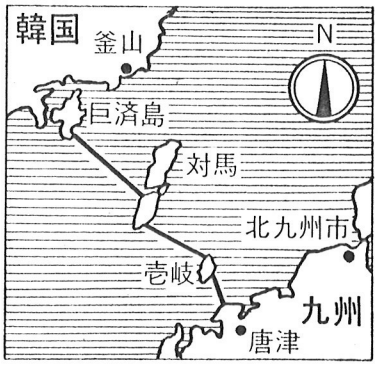
この構想に賛同して日本側では、昨年一月「日韓トンネル計画研究会」が世界平和教授アカデミー（会長松下正寿元立教大学総長）の一機関として発足、昨年の四月には国際ハイウェイ建設事業団（理事長梶栗玄太郎氏）も発足し、ボーリング調査を開始。今年の五月、日本地質業界の最高権威者である佐々保雄北海道大学名誉教授を会長にした日韓トンネル研究会を設立、夢の構想が動き出したのがこれまでの経過だ。

日韓海底トンネル構想は、佐賀県唐津から壱岐・対馬を経て釜山近くの韓国・巨済島に上陸するルートと福岡県糸島町を出発するルートなどが検討されている。大林組プロジェクトチームの作成した構想では、日本側は唐津市から加部島を経て壱岐まで延長三十二キロのうち海上部二十三キロをつり橋などの橋りょうで通す。壱岐・対馬間は海底部四十九キロを直径六メートルの二本のトンネルで結ぶ。対馬から韓国巨済島南端まで五十三・二キロは水深もあるため鋼鉄とコンクリート製のチューブを連ね海中につるす沈埋トンネルにする構想だ。

海底トンネルの全長は約百三十キロに及び、世界最長の青函トンネルの四倍近い長さ。まさに史上空前のトンネルになる。工期は約二十年、費用は三兆円を超える見込み。佐々会長は「青函トンネルの技術をもってすれば実現可能。日韓トンネル着工により新しい技術開発も進む」と言い切る。

すでに実現に向けて昨年二月唐津市に現地事務所を設け、資料の収集、ボーリング調査を実施している。今年度も約十億円をかけさらに詳しいボーリング調査に入る計画。こうした動きを受け、地元九州でも七月に日韓トンネル研究会九州支部（支部長高田源清氏＝九州大学名誉教授）が発足。同支部のメンバーは福岡、佐賀、長崎県下の大学名誉教授、現役の教授や土木・地質調査の関係者二百名に及び、今後実現に向け全面協力していく方針だ。

高田支部長は「われわれの子供や孫のためにも二十一世紀の夢としてバックアップしていきたい」と抱負を述べている。日韓トンネル研究会では今後建設実現の可能性を見極めるため政治、経済、技術、環境などの調査研究を行い、将来は国家プロジェクトとして育てていく構想だ。



現段階では技術的可能性の検討が始まったばかりで経済的効果などの討議はこれからになる。とくに日韓トンネル構想は国家的プロジェクトであるため多くの面で解決すべき問題が横たわっている。しかし経済的効果面では「青函トンネル建設によって先進導坑技術が進んでおり、日韓トンネル構想では石油、天然ガス探査を同時に進める」ことも可能」（中川学一橋大学教授）といった指摘もあり、日韓トンネル構想はロマンを秘めた巨大プロジェクトといえそうだ。